聴覚障害教育とともに

旧職員　藤田陽三

中国古典文学をかじっていました私が、まったくの畑違いの、とはいうものの、どこかで共通する、聴覚障害教育に関わり、京都府立聾学校に四年間在籍後、昭和四十七（一九七二）年、山城高等学校に聴覚障害教育担当者として赴任させていただきました。

聴覚障害教育担当とはいえ、生来の好奇心から、故・折田輝英先生の声かけで剣道部の、そして自分の趣味の域を少し超えた吹奏楽部の顧問などを持たせていただきながらの十年間を、楽しくまた意義深く過ごさせていただきました。思い起こせば、当時の山城高校の庶民的雰囲気の中で、暖かい先輩の先生方のご指導と、人なつっこい生徒たちの中で、恙無く過ごさせていただけましたことは私にとって教師生活の中の幸甚のひと時でした。とりわけ、本務の聴覚障害担当者としましては、全国初の試みとして多くの障壁が立ちはだかる中を、当時の井上隆夫

教頭先生を中心にした全教職員あげての協力体制の中で数多くの卒業生が自己の障害を認識し、克服して、山城高校で学んだものを基に現社会で活躍をしている様子を見ることのできる幸せを身にしみて感じています。

昭和四十六（一九七一）年四月に全国に先駆けて創められた、「聴覚に障害のある生徒を一般校に受け入れ健聴生と共に後期中等教育の課程を履修させる。」という京都府教育委員会の独自の新しい教育制度は、当初全日制二人定時制六人の入学生徒から始まり、今日までに七十九名の卒業生を出し、卒業後の進路も国立大学や私立大学・各種専門学校への進学や、公務員・金融機関・福祉施設などへの就職など多種多様にわたる希望進路の実現を見ています。

受け入れ二年目に転任し、千数百人の中の数人の聴覚障害生徒の属する学級担任・担当者としての毎日は、予想もつかない日々の繰り返しでした。そんな中、私の高校時代の恩師の一人、故・林敦子先生が同じ学年の担任団にいらっしゃってくださったということは大きな喜びでした。陰になり日向になり、かつての教え子の私を励まし支えてくださったことは今でも鮮やかに脳裏に刻まれています。受け入れ二年目で聴覚障害に関する情報も不十分な中、時には「聞こえにくいのだから、とにかく大きな声で話せばいいのだね。」とか、「手話がわからないから

授業ができないですよ。」、「板書しながら説明していたら、『分かりません』といわれたよ。」、「冗談がなかなか通じにくいね。」などなど、今では考えられないような相談や苦情の毎日でした。しかし、多くの先生方の絶え間ない研修や、生徒たちの熱い友情に支えられて、晴れの一期生二人は浪人しながらも国立大学と私立大学に合格し、自らの希望進路を実現しました。爾来、多くの聴覚障害生たちは適切な進路指導の下にそれぞれの希望の道を選択し、今日では社会の一員としてたくましく生きているということを耳にし、目にしています。それと同時に、この新たな制度が、教室やクラブで聴覚障害生徒と共に過ごした健聴生の中から、福祉関係に進む多くの卒業生を生み出しましたことは、単に障害のある生徒のためだけの制度ではなく、一般の生徒たちにも多くのものを学ぶ機会を生み出すものともなりました。

以後、今日では、通学可能な京都府内から多くの聴覚に障害のある生徒たちが健聴生と共に学べる、また、学区内の一般生徒にとっては障害のある生徒と共に学べる学校としてすっかり定着し、全国から数多くの教育関係者などが見学や研修に来られる場ともなっています。

障害児教育における「個に応じた教育計画の実践」は、すべての学校教育における一つの基本理念でもありましょう。その

実践を山城高校がいち早く実践してきたということは、世に誇れる大きなものであります。

多くの障害者が名実共に市民権を得、社会のかけがえのない構成員として活躍されています今日、改めて山城高校のこの教育実践が高く評価され、また新たな目標を樹立し京都府民の期待にこたえられる教育実践を進められることを期待します

京都府立山城高等学校が、さらに新たな百年の歴史を綴られるにあたりまして、ここに駄文を寄せさせていただき、お祝いと共に期待の一端を思い出を交えて記させていただきました。

山城11回　伊藤信子